

【一日目】

「なんじゃこの惨状は！」その一日は、天藤修の叫び声で始まった。

座卓は見事に裏返り、布団は部屋の隅で山のように丸まり、箆筒にしまわれていた服は悉く部屋中に敷き詰められていた。

時刻は午前九時。大学の講義はないので起床時間としては問題ない。一日かければ部屋の掃除はできるだろうが、なんと言っても寝起きである。そうそう動く気にはなれない。

修は仕方なく部屋の現状は改善しないまま、座卓を元に戻して朝食の準備を始めることにした。準備と言っても、適当にパンを食べるだけだが。

パンを食べながら部屋を見回す修。一つしかない窓にはしっかりと鍵が掛けられており、玄関の扉にはチェーンは掛けられていないものの、鍵のほうは問題がない。修が押し入れを開けてみるも、崩れかけの布団が置いてあるだけで、人が隠れている様子もない。

完全な密室の中、修の部屋は荒らされていた。そのことに恐怖を覚える。

「……まさか、な」不安を煽るような想像をしたらしい「まさか、そんなことあるわけがない」そう言い聞かせながらも、修の体は震えている。

そして、携帯を手に取り、とある人物へ電話を掛ける。数秒のコール音の後、相手と繋がったことに安堵しながらも、修はまくし立てるように電話口の相手に現状と自分の思い描いた説を告げる。

「助けてくれ！ 朝起きたら部屋中が荒らされてたんだ。窓も玄関も鍵は閉まってるし、人が隠れてる様子もないのに、机がひっくり返って布団が部屋の隅に寄せられて俺の服がばらまかれてるんだ！ きつとこいつは幽霊の仕業なんだよ、ポルターガイストなんだよ！ 頼む、お前の力で俺に取り憑いた悪霊を追い払ってくれえ！」涙目で訴える修。

どうやら、修を恐怖させていた想像とは、幽霊のことらしい。電話の向こうの人間は、果たしてどう思ったのか。暫くの通話の後、電話を切る修。

そして携帯を持ったまま、部屋を右往左往する。仮にも二十歳を過ぎた人間とは思えないほど落ち着きのない行動である。

電話から数十分経つただろうか。漸く落ち着いた修は、携帯を適当な場所に置くと、部屋の片付けを開始する。

結局その日は部屋の片付けに終始し、満足に何かをすることも出来ないまま眠りに就いた修であった。

【二日目】

「待ってたよ！」そう言って修が迎え入れたのは、修と年の頃が同じ一人の青年——大石竜之介——だ。坊主頭で、修とは正反対の落ち着きを持った男性だ。そして大石は修を落ち着かせながら、部屋中を見回す。

「どうだ、幽霊はいるか？」と訊ねる修。どうやら招かれたのは幽霊が見える類の人間らしい。どうにも胡散臭いが、修は信じているようだ。

「んー、特に何も感じない。っていうか、寺の人間が全員そういうの見えるところじゃない方がいいぞ」頭を掻きながらそう答える大石。

確かに、寺生まれだからといって幽霊が見えるとは限らない。まだ若いのだから、修行中ということもあるだろう。

「でも、今朝もやられてたんだぜ？ まだ片付け終わってないからひどいだろう？」そういつて部屋中を指さす修。確かに、昨日と同様に部屋中の物が散乱している。

「ああ、このことだったのか。てっきりいつものお前の部屋かと思ったぞ」と落ち着き払って毒舌を吐く大石。「酷いっ！」と嘆く修だが、恐らく普段の素行がそう思わせてしまうのだろう。

「取り敢えず幽霊の仕業じゃないよ。坊主の端くれとしていわせてもらえば、多分こりや人の仕業だな」それだけ言うと、どさつと乱雑に散らされた服の上に座る大石。それを見て察したのか、台所にお茶を取りに行く修。

「でも、鍵はきちんと閉まってたんだぜ？ 人が隠れてる様子もなかったし」特にこれといった事をしなかった大石を責めるような口ぶりの修だが、そもそも幽霊の仕業でないのなら、寺の坊主が手伝えるのは掃除程度が関の山である。

それでも大石は修を責めることなく、諭すような言葉を口にする。「いいか、幽霊の仕業だったら、流石の俺でも何か感じる。それが無いから言ってるんだ。泥棒かストーカーか、盗まれた物がないなら後者だな」

「ストーカー？」修が間抜けな声でそう訊ねる。「そう、ストーカー。悪質なやつだと合鍵とか作ったりするからな。それじゃないか？ 安アパートの、しかも二階だろ？ 作るの簡単だと思うぜ」大石が落ち着いた声でそう答える。

それを聞いて身震いをさせる修。それを見た大石は、お茶を一気に飲んでから、修に対して口を開いた。「まあ、もしストーカーなら寺の坊主じゃなく警察を呼ぶべきだな。何か証拠でも持って行けばむこうも丁寧に対応してくれるさ」

修は、差し出されたコップにもう一杯お茶を注ぎながら訊ねる。「証拠って、例えばどんなのだよ」注ぎ終えたコップをもう一度大石に渡す。

「ビデオカメラとかが良いと思うけどな。あれならきちんとした証拠にもなるだろう。この部屋の配置だったら、そうだな……テレビの上に置けば、玄関も窓も押し入れも箆箆も撮れるだろう」受け取ったお茶を再び一気飲みしてから答える大石。

差し出されるコップを苦々しく見ながら「……お前、何杯飲むつもりだよ」と揶揄する修。

「む。こっちは無駄足だったんだ。お茶ぐらい気前よく注いでくれても損はしないんじゃないかないか？」と返す大石。修もこれには反論できず、三杯目のお茶を注ぐ。

それをおいしそうに飲む大石を見ながら、ビデオカメラのしまつてある場所を思い出す修であった。

【三日目】

その日、修は友人である椎名恭介を部屋に招き入れた。招き入れたと言うよりは引きづってきたと言うべきか。

「いいからいいから」と修に言われながら、何が良いのか分からないまま、安いポロアパートの六畳一間に招き入れられる椎名。

時刻は午後十一時を過ぎた頃。隣の住民はとつくの昔に眠りこけているであろうから、壁の薄さも考慮すると、およそ大学生が集まるには不向きと言って差し支えないだろう。案の定、椎名の居心地と機嫌がすこぶる悪そうなことこの上ない。

「一体何の用件だよ」と悪態をつくように修に尋ねる椎名。どうやら招かれた用件は聞かされてはいらないらしい。

修は修で、戦々恐々といった、真剣な表情をしている。その必死の形相のまま、テレビの上に置かれたビデオカメラを手に取り、椎名の方へ向き直る。

「実は」と前置きし、「俺はストーカーに狙われているかも知れんのだ」と修は言った。

「は？」と返す椎名。当然の反応だろう、急にそんなことを言われて『よしじゃ俺に任せろ！』と断言する人間はまずいない。警察であろうと二度聞きするに違いない。

勿論真剣な修は「真面目に聞けよ」と椎名を責める。「俺は今命の危機に瀕しているんだぞ」と、冗談のようなことを真面目に話す。

それだけ言うと、修はせつせと手に持っているビデオカメラとテレビをケーブルで繋ぐ作業に入った。どうやらビデオカメラに録画した映像を見せたいらしい。

椎名はというと、まだ状況を正しく把握できていないようで、間の抜けた表情のまま、ストーカーがどうのこうのと独り言を呟いている。必死に整理をしているらしいが、修の情報もほとんど断片的であるため、整理ができるわけもない。

「なあ、ちゃんと説明してくれよ。どうしてストーカーがいるなんて思うんだよ」と修に尋

ねる椎名。

その間に修は、カメラとテレビの接続をしながら、一瞥をよこさず「それは今から説明するから」とだけ答え、作業に集中する。

慣れない手つきで接続を終えると、もう一度椎名の方へ向き直る修。その表情は先程と同じく真剣で、ふざけている様子は微塵もない。その雰囲気を感じたのか、椎名もからかうような言い方をするのは控えた。

「一昨日からなんだけどな。朝起きたら部屋が荒らされてるんだよ。一体どうすればいいかと思って、取り敢えずビデオカメラを設置したんだけど、一人で見るのが怖くてさ。もし何か映ってたら一人だとパニック起こして何も出来そうにないから」と、修は言った。

「そうだったのか……」と心配するように椎名は返した。彼らは高校生からの付き合いで、お互いに信頼しあっているからこそ、修は椎名に相談したのだ。その気持ちを推し量ったかのように、椎名は「よしじゃあ俺に任せろ！」と断言した。

それを聞いて、修は安堵の息を吐く。それからビデオカメラに手を伸ばし、再生ボタンを押した。

瞬間、テレビ画面に映ったのはビデオカメラを設置する修の姿だ。位置を微調整しているのか、カメラのアンクルが左右に揺れる。

そして次に映し出されたのは、缶ビール片手に晩酌をする修の姿だ。録画しているテレビ番組でも見ているのか、笑いながらビールを飲んでいる。

映像としてはただの間抜けなホームビデオだが、その後どんな映像が映るとも知れない。そう身構えている二人は、真剣なまなざしのままテレビを見ている。

二本目、三本目と、次々に缶ビールを空にしていくテレビの中の修。既に録画したものは見終わっており、テレビは消えている。ただ手に持った缶ビールを喉に流し込みながら、時折つまみをはさみ続ける。

ただ修が酒を飲み続ける映像が数時間続いた後、酔いが回った修は、着替えもしないまま、側の布団に倒れ込む。

「寝たな」と、わざわざ確認する椎名。それに答えるように「寝たよ」と口を開く修。修の話が正しいのであれば、映像はここからが本番である。

どんな映像が映るか、目を皿にしてテレビを凝視する二人。不審人物は玄関から入ってくるのか。それとも窓から侵入してくるのか。或いは怪談話のように既に部屋の中にいるのだろうか。

そして映像に起きた最初の変化は、寝ていると思われる修自身だった。悶えるように布団の上で身動きする。そうかと思えば、急に上半身だけを起き上がらせた。その目は据わっていて、悪酔いしているのは明らかだ。

そのまま立ち上がると、手始めに座卓をひっくり返し、次に布団を蹴り飛ばし、筆筒の引き

出しを開けて中の衣服をばらまき始めた。

嘔然としてテレビを見続ける二人。そして、ずっと椎名は立ち上がり、右足を引いた。

「酒癖悪いだけじゃねーか！」一気に右足を振り抜いて修の背中を蹴り飛ばす。

「ごふうっ」呻きながら前に倒れる修。それを踏みながら文句を言い続ける椎名。

得てして真実というのは全くもってしようもない、笑い話にもならないくだらないものである。

【五日目】

その日の夕方頃、修の部屋に妹の天藤千代が訊ねてきた。

彼女が持ってきたのは母親からの差し入れで、ついでに兄の部屋に泊まるということになっているようだ。まだ高校生の彼女だが、翌日は日曜日なので特に問題はない。

「いやあ、何時みても、男の人の部屋だね。ところでお兄ちゃんはちゃんと掃除とかしてるの？」と、まるで母親のようなことを聞く彼女。台所に立つ修はその質問に「ああ」と適当に答える。

普段はあまり料理をしない彼だが、妹伝いに母親にそのことが知られては都合が悪い、と考えている彼は、妹が家を訪ねる日は決まって慣れない料理をすることに決めているのだ。

今日のメニューはカレーのようで、香辛料の香り漂う大鍋を火に掛けながら混ぜている。料理といってもこの程度だが、カレー好きの天藤を騙すにはこれぐらいで十分であることを心得ているのだ。

その証拠に、部屋中に満ちるカレーの匂いに、上機嫌になりながら鼻歌を歌う天藤。実に単純な性格である。

天藤は部屋を見回す。「家具の配置変わったね。心境の変化？」目聡く部屋の変化に気付いた彼女は、修に問いかけるが、これも「ああ」と適当に流された。

数日前の惨事後、修は一日がかりで部屋を片付け、壊れた物を修理ないし処理し、どうにか元の部屋の姿へと戻したのである。壁紙の損傷がひどかったので、箆箆を移動させ、それに合わせて模様替えも済ませた。修なりの苦肉の策である。

「あれ？」と、浮かれ調子だった彼女は、机に走っている亀裂に目がいった。「お兄ちゃん、この机のヒビって何？」台所に立つ修は、その質問に肩をびくりと震わせた。

座卓の亀裂がついた経緯を、修は家族に話してはいない。成人したての自分が、まさか酒癖の悪さで部屋を荒らし回っていたと家族に知られば、どのようなお叱りを受けるかは想像に難くない。

椎名には蹴り回されたあげく呆れられ、飲酒禁止令まで出されたあの事件は、決して家族に

知られてはならず、この場で彼女に真実を話すことはもつてのほかである。

どのような言い繕うかと考えあぐねていると、苦し紛れに「それは……ほら、椎名だよ。あいつと暴れてたら、座卓にぶつかっちゃまってな」と、まるで小学生のような言い訳をする修。

「暴れてたって……駄目だよ、もういい大人なんだから。本当にお兄ちゃんと椎名さんは仲良いよね」と、苦しい言い訳をすんなりと信じる彼女。高校時代の修と椎名の関係がどのようなものであったかが窺い知れる。

椎名を巻き込む形で事なきを得た修は、安心してカレーの調理に戻る。その一方で、修に悟られぬように部屋の物色を開始する天藤。思春期にも関わらず、随分と仲の良い兄妹である。

箆筒などは音でばれるため、本棚やラックなど、音の極力しない場所から探索を始める彼女は、押し入れの襖付近で、妙な物を見つけた。

手に取ったそれは、兄の物とは思えない長い髪の毛だ。この部屋にそれなりに長い髪を持っている彼女だが、部屋に落ちていたそれはもう少し長い。

腰に届くほどの長髪の男の友人でもいれば話は別だが、そうでなければ可能性は一つだけである。

「……なるほどなあ」と勘繰る天藤。髪の毛一つで辿り着いた結論にご満悦なのか、部屋の探索もそこに切り上げる。

ちようどそこへ、カレーを二皿分もつてやってきた修。「お待たせ……なんだ、気持ち悪い笑い方して」と、天藤の顔を見て言う。

「いやいや、我が兄も色を知る年齢か、と」と、にやにや笑いながら口にする天藤。余程先程の髪の毛がお気に召したらしく、カレーの匂いを嗅いでいた時よりも上機嫌だ。

それを聞いた修は首を傾げる。「何言ってるんだよ。そういうお前はどうかんだ？ 彼氏の一人でも出来たのかよ」彼女の発言を特に気にとめる風もなく、逆に彼女の予想外の質問をする修。

「いや、それは……」顔を真っ赤にしながら慌てる天藤。それを面白げに見ながらコップに麦茶を注ぐ修。非常に仲睦まじい兄妹である。

照れ隠しか、目の前のカレーを嬉しそうに頬張る天藤。それを微笑みながら眺める修は、ゆっくりとしたペースで食べる。普段は一人で食べている彼は、こうして偶に家族と食べることを嬉しく思っているのだろう。

久しぶりの家族との食事に、心もお腹も満たされながら、五日間に及ぶ修の六畳一間の珍事は終わりを告げた。

以上が、『私』の見た五日間に及ぶ六畳一間の珍事である。

【一日目】

『私』の一日は、朝の挨拶から始まる。

「おはよう」

眠っている彼を起こさないようにそれだけ言うと、散らかった部屋の物を踏まないように避けながら台所に向かう。

今朝のパンは餡パンに決めると、台所から餡パンを拝借し、素早く押し入れの中へと戻っていく。この時、彼を起こさないように最大の注意を払うのだ。

音を立てずに押し入れに戻ると、上の板をはずして身を滑り込ませる。この動作も慣れたものである。

ここはアパートの二階で、押し入れの上部分を外せば容易に屋根裏へと入ることができる。元々は埃っぽい場所なのだが、念入りに掃除したおかげで、今やネズミ一匹、虫一匹すらいはしない。

定位置にもどると、天井に開けられた穴から下の様子を伺う。それとほぼ同時に目覚まし時計が鳴り、彼が起き上がる。寝ぼけ眼をこすりながら、部屋を見回して叫んだ。

「なんじゃこの惨状は！」その一日は、天藤修の叫び声で始まった。